

海沿いの小径^{こみち}

かつては主要な街道であったその道は
今では歩く人もないが

あふれるばかりの優しい陽光が沁み込み
歩みを進める私たちを、昔のように包んでくれている

その海沿いの湾曲した道は
私の原風景に通じているのだった

あなたを背負ってでも
私はそこへ歩いて行く

あなたは菱形のぼやけた紋章を見つめている
光の分散し、虚空に投影された紋章を

その紋章こそ、打ち棄てられ、野晒しにされた詩人の墓所の^{ありか}在処を
証言するただひとり残された者であることを知っているのですね

右手の小高い丘から、左手の断崖の下へと
大気がそっと息を流して私の汗を乾かしてくれている

伝説にしておもう
そうして私たちは、その果てに消えてしまおう

ああ、粒子の海原を左手に遥かに見渡してごらんなさい
あなたにも「うた」が聞こえるだろう

誰が声高に「歴史」を語ろうと
そんなことは関係ないのです

あなた自身のうたが、まるで伝説の叙事詩のように
私をとらえて放さない

あなたの^て掌を取るこの掌を信じていてください
地下牢の中で吐かれた棄て台詞の数々など忘れるのです

あの原風景からひとり立ちさせるとき
そのうたはきっと波のように世界に伝わってゆくのです

だから、もうすこしだけ、さあ私の背に乗り
もう少しだけ目を閉じてはいけません

その代償として、この大気が
あなた自身の肉体を所望するというのなら
おお、私も同様に呑み込むがいい！

(2005.1.1)